

第六一回卒業式式辞

皆様、おはようございます。本日、本校は、第六一回目の卒業証書授与式を迎えました。ご来賓として、学校法人久留米大学からは神代正道理事長を始め理事の皆様、久留米大学からは永田見生学長を始め学部長の皆様、附設高校同窓会・後援会からは、長谷川房生会長、緒方徹志会長並びに役員の皆様、そして、懐かしいかつての先生方にご列席いただいております。お忙しい中、皆様、ありがとうございました。

六一回生の皆様、また、保護者の皆様には、本日を迎えられることに、大変感慨深いものがありと存じます。特に、六一回生の皆さんは、十代の難しい時期を経て、まだまだ、研鑽の時期は続くと思いますが、やがては、新しい世の中を切り開いて行くことになりま。今の段階では、皆さんは海のものとも山のものとも言えない状態であろうと思いますが、目指すべき方向性はそれぞれにおありでしょう。わたくしからも、ぜひとも目指してほしいということがありますので、今日は、そういう話をしたいと思えます。

まず、最初に、本校の建学の趣旨にある「国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物」を実現してほしいと思えます。そして、また、附設の校歌の凄さ、附設草創期の熱情溢れる老漢文教師の青春への想いの凝縮された姿を味わってほしいと思えます。なかでも三番は殊更に意義深く、初期の先生たちの人生も投影されていると思います。時代は変わりましたが、込められている感情を追体験し、共感することは、もう誰にもできないかもしれません。しかし、皆さんにも、このメッセージ性だけはしっかりと胸に刻んでおくことができるでしょう。

こういうことを念頭に、皆さんは、それぞれに、「高度の専門職業人」として活躍されることが期待されています。その上で、わたくしからは、皆さんに、充実した人生を実現してください、という言葉を送りたいと思います。これは皆さんに関わったすべての人たちの希望でもあるわけでもあります。式辞としては、これだけを言ってしまうと、後はもういいと思う人ももおかしくはありませんが、もう少し辛抱してください。まだ、考えてみなければならぬことがあるのです。

皆さんは、まだ、一人前でも何でもない、ヒヨコでさえもないからこそ、申し上げるのでありますが、ただの「高度の専門職業人」であればいいのか、とお尋ねしたいと思えます。この問いは、これからの皆さんの自己研鑽に欠かせない「覚悟」というか「志」のようなものを問題にしているわけです。もとより、修羅道の世を救うために、為他の気概を支えに、少しでも貢献したいと答えるのは間違いとは言えないでしょうが、そういう貢献ができるかもしれない人間とはどんな人間なのか、そういう人間に近づくよう、自らを鍛え上げら

れるか、というのが、この問いの趣旨です。

考えるまでもなく、「高度の専門職業人」であろうが、なかるうが、誰でも社会生活をしており、しかも、専門職業を通じて関わる部分というのは意外と小さいものです。もちろん、一人ひとりの生活や人生は専門職業に依存しているわけですが、家庭生活でも、近所付き合いでも、あるいは、社会人としての一般的な生活でも、専門的な職業的な知見を超えた判断が欠かせません。実は、専門的な職業分野でも、その訓練課程で身に付けた知識技能や経験はすぐに陳腐化してしまい、分野が大事であれば大事であるほど知識や技術の革新が盛んなので、早く役に立たなくなりがちだというのが実情でしょう。もちろん、皆さんには、立派に、「高度の専門職業人」になっていただきたい。しかし、「高度の専門職業人」であるということの内容は、時々刻々変化していきますし、ある意味で、どんどん特化を進めなければならないかもしれません。皆さんには、こういう「高度の専門職業人」であることが実現できれば、万事解決というわけではないことを意識してほしいのです。

「役者バカ」という言葉を聞いたことがあるかも知れません。歌舞伎役者の何がしは舞台の上では役どころの演技を通じて芝居そのものを文字通り類のない名舞台として実現する力があつたが、舞台を離れると全く無能、つまり、バカであつたというようなことです。極めて高度の専門職業人の規範型として語られる場合があります。しかし、「役者バカ」が成り立つ条件を考えてみますと、歌舞伎役者の何がしは、実は、個人なのではなく、舞台に関わるある擬人的な集団を何がしという名前で代表して舞台上の役だけを果たすことが集団内の役割として定まっております。個人なら必要とされる他の要素は担当する人たちが集団内に別にいることがわかります。このシステムが純化すれば、人格のない演技器械「役者バカ」が成り立つわけですが、歌舞伎役者でも大方の場合は、なかなかそこまで人格を捨てきれないということでしょう。「役者バカ」を規範型とする発想には、日本の伝統的な、ことに、江戸時代の社会構造が反映されており、仮に、皆さんのうちに歌舞伎俳優を指す人がいても、「役者バカ」を指すことには、もはや、意味はありません。

そこで、先ほどの『ただの「高度の専門職業人」であればいいのか』という問いへの答えとしては、いや、それでは不十分だ、というものが期待されていることは明らかだと思います。しかし、「それでは、どうあればいいのか」という問いが当然続くでしょう。まずまず難しい問いになるわけですが、わたくしなりのヒントを申し上げます。皆さんには、「健全なる素人」であることを目指してほしい、と思つています。これでは、しかし、「健全なる素人」とは何か、「高度専門職業人」であればいいのか、と尋ねながら、「素人」とは何だ、ということになるかと思ひます。

「健全なる素人」というのは、皆さんは余り目や耳にしたことはないと思ひますが、少し

前から、わたくしは、いろいろな折に書いたり話したりしているものです。今回の式辞は、この「健全なる素人」をテーマにしてみようか、と思い、ようやく、ここまで来ました。一応、定義のようなものもあるので、紹介しましょう。「健全なる素人」とは、

専門家ではないが専門知識の根底の意義について直観的な感覚が備わっていて
専門家が陥りがちな視野の狭さに囚われずに本質を貫徹した判断ができる人

であるとして了解してください。もちろん、このような人が完全な形で存在するはずはありませんが、人間の在り方としては規範性があると信じています。特に、理想型としては、

少なくとも一分野では卓越した専門家であり、それ以外の分野でも、卓越性を
獲得した分野での訓練や経験を通じて得た洞察力に基づく直観的な判断力が
発揮できるような人物

ということになりましょう。

卓越性というものは、どんな分野であつても瞬時には獲得できません。このためには長い訓練や自己研鑽が欠かせません。そして、他分野でも有効な洞察力などは、これは目指すべきものではなく、結果として付いてくるかもしれないものです。しかし、専門分野として選んだはずのものも日々更新されていく過程では、未知の分野と変わらないと思つてもおかしくない面もあるわけですから、どこでも通用するはずの洞察力なるものを得ようという意欲をもって自らを鍛えてください、ということになります。

ところが、さらに、よく考えてみますと、「健全なる素人」というのはアイデアとしては、何となくわかつたような感じがしても、具体的にはどうなの、とか、それでどうなるの、といったような疑問がすぐに浮かんできます。もともと強い好奇心があり、広く深い想像力が育っていなければいけないだろうし、何にでも関心を持つてなければどうにもならないかも知れません。幸い、皆さんが基本的に備えている素質ではありませんか。

そこで、例えば、こういう人が「健全なる素人」の典型ですよ、として、お示しできればいいのですが、それが簡単ではありません。あるいは、むしろ、そんなに難しく考えることはなくて、皆さんがこれから出会う人たちの中に、あの人は専門分野でも素晴らしいけれど、違う分野のことや、その他、いろいろなことが実によくわかっている、という人がきつといるでしょう。そういう人を観察していると、それが、ものすごく勉強をしている、ということだけでなく、何か、センスが違うという風に感じる場合があると思います。問題は、このセンスのもとです。その秘密をつかんで、皆さんも周辺の人たちから「あの人

はできる、何か、すごい魅力がある」と評価されるようになってください。

以上要するに、皆さんには「優れた専門職業人」を目指してほしく、しかも、この「優れた専門職業人」とは、「健全なる素人」であって「高度の専門職業人」であるという、ややわけのわからないものなのですが、具体的なイメージにちかいものとして、梅棹忠夫先生が国立民族博物館の初代館長として館員に示した館員心得をご紹介しましょう。これは五項目から成り立っていて、

ふかい学識

ひろい教養

ゆたかな国際性

柔軟な実務感覚

ゆきとどいたサービス精神

を館員に要求しています。民族博物館内では、「五箇条の御誓文」と呼ばれていたようです（梅棹忠夫・小川修三「梅棹忠夫語る」日本経済新聞出版社）。皆さんが志向している「高度専門職業人」の内には、今の時点の常識では、これら五項目のすべては必須であるとは言えないものもありますが、「健全なる素人」としては、これらは自然に身に付いてしかるべきものだと思います。

さて、最後に一句紹介しましょう…

道あらば ふみももらすな 高砂の

峯に至りぬ 岩間づたひに

これは関流という和算家の一門の最高免許、印可状と言いますが、その冒頭にある句だそうですね。大成するには、苦勞を重ねながら、しっかりと研鑽を積み続けなければならない、というのが意味でしょうか。皆さんにわたくしが申し上げてきたことは、ぜひ三六〇度の眺望の効く頂まで登ってほしいということですが、がんばってください。

平成二五年三月一日

久留米大学附設高等学校 校長

吉川 敦